

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 3 月 31 日現在

機関番号：14601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520645

研究課題名（和文）19世紀末から20世紀初頭の日本の唱歌と太平洋地域近代歌謡文化の宣教化と脱宣教化

研究課題名（英文）Missionization and De-missionization of the Pacific Ocean Region Modern Song Culture until the Early 20th Century from the Late 19th Century

研究代表者

安田 寛 (YASUDA HIROSHI)

奈良教育大学・教育学部・教授

研究者番号：10182338

研究成果の概要（和文）：日本の唱歌を含む太平洋の歌謡文明のキリスト教による宣教化は捕鯨活動と緊密な互惠関係のもとに展開され、脱宣教化は anti-missionization（反宣教化）の方向ではなく、post-missionization（後宣教化）の方向に向かっている。新しい歌謡の創造による新たなアイデンティティ確立という共通の問題は、キリスト教の歌謡文明からの脱却からではなく、それを土台とした、あるいはそれと融合した新しい伝統の創造という方向に向かっている。

研究成果の概要（英文）：The missionization of the Modern Song Culture in the Pacific by Christian organizations has occurred in close mutually beneficial relationship with whaling activities. De-missionization tends toward post-mission rather than anti-mission stance. Many Pacific Islander communities have created a new identity through new songs that have been achieved not by the a break from Christian song traditions, but by the creation of a new tradition fused with it, or based on the foundation of the Christian music culture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：比較文明論

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の発端は、応募者の東アジアを視野に入れた「基督教布教に伴う讃美歌教育と近代東アジア歌謡文化の成立」（科学研究費基盤（C1）平成13年度～平成14年度）にある。

(2) 応募者が唱歌を起点とした近代歌謡文化史の比較研究の視野を東アジアから太平洋に最初に広げたのは、平和中島財団国際学術共同研究助成（平成15年）による研究「音楽の土着化～アジア・太平洋地域近代音楽史とその合流～」であった。この国際共同研究の成果は共同研究者全員が参加したシンポジウム「音楽教育における地域性と国際化～過去・現在・未来～」（日本音楽教育学会第34回大会、2003年）のほか、『唱歌という奇跡 十二の物語～讃美歌と近代化の間で～』（文藝春秋、2003年）及び“Similarities and Commonalities in Pedagogical Materials used for Teaching Singing in the Asia-Pacific Region during the 19th Century”（第5回アジア・太平洋音楽教育研究シンポジウム、2005年）、「19世紀ポナペ島の讃美歌集」『奈良教育大学研究紀要』（2004年）で発表した。

(3) この海外共同研究の成果は継続する必要性を生じさせた。そこで、「フランス領ポリネシア及び周辺への讃美歌の普及とそれが近代歌謡形成に及ぼした影響」（科学研究費基盤（C）平成19年～平成20年）によってポリネシアの研究を行った。この研究によって、讃美歌の近代歌謡形成に与えた深刻な影響を日本、韓国を超えて、ミクロネシア、ハワイ、ハワイ以外のポリネシアといった地域においても検証し、「明治基督教音楽としての唱歌とアジア太平洋の讃美歌との関係」

『シンポジウム「明治が聴いた音～唱歌・賛美歌・西洋音楽～」（日本比較文学会第45回東京大会、2007年）、「アジア太平洋全体との関係から見た讃美歌による日韓近代音楽の西洋化の過程」『ラウンドテーブル「日韓近代音楽の相互関係」』（第9回日本音楽教育学会ゼミナール～日韓合同ゼミナール～、2008年）で発表した。

(4) 最近では以上の研究に「捕鯨」という経済的視点を導入し、19世紀の太平洋の基督教布教という宗教活動は、現在の石油産業に匹敵する捕鯨産業という経済活動と密接に関係していたことを明らかにし、その成果は、「『白鯨』と日本の唱歌」『比較芸術論』（京都造形芸術大学比較芸術学研究センター第40回比較芸術学研究セミナー、2008年）、「明治初期の宗教政策と近代音楽」『パネル・ディスカッション「音楽における異文化受容3—宗教の視点から—」』（日本音楽表現学会第6回（ベル・ジーリオ）大会2008年）で発表した。

(5) 本研究は以上の研究成果を総括し、さらに発展させるものである。

2. 研究の目的

(1) 本研究では19世紀に東アジアを含めた太平洋全域で起こった西洋音楽に遭遇した土着音楽の壊滅的打撃という歌謡文化の根本的変化を宣教化と脱宣教化という視点から見直し、各地域間の相互関係と相違をふまえた全体構造を見渡すことを目標にしている。

(2) 歌謡文化の宣教化とは、それまでの伝統歌謡がキリスト教賛美歌に置き換えられて行くことを意味し、脱宣教化とは、賛美歌を伝統歌謡の様式にしたがって演奏したり、さらには作り直したりすることや、賛美歌から

新たな歌謡を作り出すことを意味している。

(3) 日本の近代歌謡の根を形成し、台湾、韓国、中国の近代歌謡に決定的影響を与えた唱歌が誕生した基盤は、近代化、西洋化にあると考えるのが普通であるが、唱歌とは実は脱宣教化であったという見方によって、太平洋全域の宣教化と脱宣教化のコンテクストの中に唱歌を位置づける。

3. 研究の方法

(1) 3年間に分けてハワイ大学ハミルトン図書館太平洋コレクションとビショップ博物館アーカイヴで、賛美歌集、賛美歌とそれに関連する音楽の録音資料などを中心に資料及び関連する文献の調査収集を行う。

(2) ケーススタディとして東サモア、トンガ、パプア・ニューギニア、トラック、ポナペ、ニュージーランドを選び、フィールド・ワークを毎年行う。

(3) 2年目に海外共同研究者と意見交換をし、シンポジウムを開催する。

(4) 最終年で収集した資料・文献・情報を分析、考察し、調査収集を補完しつつ結論を導く。

4. 研究成果

(1) 宣教化の根本原因である太平洋の捕鯨活動について、アメリカ東海岸の捕鯨基地と宣教師養成及び派遣との密接な関連、太平洋での捕鯨基地と宣教基地との密接な関連について明らかにし、太平洋の歌唱の宣教化は捕鯨活動と緊密な関係を有していたことを考証した。

そのケーススタディとしてニュージーランドを取り上げ、ニュージーランドにおいて

も捕鯨と宣教とが互惠関係にあったことを具体的に跡づけることが出来た。つまり、捕鯨活動にとっては、船員の放縦な生活を戒める他は、野蛮で凶暴である現地人をキリスト教化し安全に捕鯨活動が出来るようにするなどの利益があり、一方宣教活動にとっては捕鯨の基地である港を使い、捕鯨船を人員物資の輸送に使うという利益があり、互惠関係にあったことを論証した。

(2) 宣教化と脱宣教化の基本資料となるアジア・太平洋の讃美歌集と曲名(チューンネーム)のデータベースを作成した。このデータベースに基づいて太平洋の各地域間、各地域内の讃美歌の比較分析が容易になった。そのケーススタディとして、タヒチ、ラロトンガ(クック諸島)、サモア、ニュージーランドの讃美歌の違いについて明らかにした。

(3) 太平洋の各地域の脱宣教化の方向の違いが明らかになった。

① サモアのカレッジでは伝統音楽の復権が盛んで、それがカリキュラムに組み込まれていっている。

② ミクロネシアのトラックではインターネットの発達によって島々の讃美歌に関する情報の交流によって、新しい讃美歌が創作されている。伝統的な4声による讃美歌のスタイルは次第に廃れている。

③ ハワイのネイティヴにとって讃美歌はすでに新しい伝統音楽となり、ネイティヴの学校では若い世代に継承すべき伝統として位置づけられている。

④ タヒチでは、伝統舞踊の伝承が近代学校システムによって現在大きく様変わりした。

⑤ 韓国で注目されることは、韓国が今日世界で最も多くの宣教師を海外派遣してい

る国になったことである。

⑥ トンガの教会では4声による讃美歌歌唱がしっかり根付いている。つまり、宣教化が未だにしっかり根付いている様子を観察できた。

⑦ 日本の唱歌を脱宣教化としてとらえた場合、日本語がモーラ言語であることが脱宣教化の最も大きな要因として働いていることが分かった。そこで歌詞のモーラと旋律のリズムとの関係の視点から考察を進め、この関係から讃美歌とは異なる日本独自のリズム形が生じる過程が明らかになった。

(4) 結論として、太平洋の歌謡文化の脱宣教化は post-missionization (後宣教化) であっても anti-missionization (反宣教化) ではないことが確認できた。つまり、太平洋の新しい歌謡のアイデンティティ確立の問題は、キリスト教の歌謡からの脱却からではなく、それを土台とした、あるいはそれと融合した新しい伝統の創造という方向に向かっていると考えられる。

(5) 上記した研究成果からも missionization (宣教化) と de-missionization (脱宣教化) という新たな視点はかなり有効であり、この視点によってアジア・太平洋の歌謡史研究は新しい段階に至るものと期待される。とりわけ missionization (宣教化) によって大きく変容した日本の近代歌謡研究において音楽の面のみならず詩とその形式の面においてもこれから新しい成果が期待できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2件)

① 安田寛、ニュージーランドにおけるキリ

スト教宣教と捕鯨との互惠関係、奈良教育大学紀要(人文・社会科学)、査読無、61(1)、2012、pp. 151-154

② 安田寛、ポリネシア各地の讃美歌相互関係に対する曲名比較の有効性、奈良教育大学紀要。人文・社会科学、査読無、60(1)、2011、pp. 91-94

[学会発表] (計 5件)

① Hiroshi Yasuda, Modern music of Japan, focusing on 唱歌、2012 International Conference at Ewha Womans University in Seoul, October 19, 2012, Korea

② 藤井浩基、Jane Moulin、Chadwick Pang、Brian Diettrich、Kuki Tuiaosopo、関庚燦、安田寛、共同企画 II ラウンドテーブル 宣教化と脱宣教化-今日の音楽教育の基本問題に関わる歴史的経緯について-、日本音楽教育学会第42回大会、2011年11月23日、奈良

③ Hiroshi Yasuda, Christian hymns and British and American whaling in the Pacific, The 8th Asia Pacific Symposium on Music Education Research, July 4, 2011, Taipei

④ 安田寛、日本の唱歌導入はアメリカのキリスト教宣教活動とどのように関わっていたのか-捕鯨活動と宣教活動とそして日本の唱歌-、日本音楽表現学会第9回甘露大会、2011年6月12日、新潟

⑤ 安田寛、太平洋の讃美歌と唱歌、日本讃美歌学会第10回大会、2010年9月18日、東京

[図書] (計 1件)

① 安田寛、他、東京堂出版、音楽表現学のフィールド、2010、269

[その他]

ホームページ等

http://near.nara-edu.ac.jp/bitstream/10105/9047/1/NUE61_1_151-154.pdf

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安田 寛 (Yasuda Hiroshi)

奈良教育大学・教育学部・教授

研究者番号：10182338

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：